

梅花女子大学 機関リポジトリ

『平家物語』と食べること

著者	柳田 洋一郎
雑誌名	梅花女子大学食文化学部紀要
号	5
ページ	36-47
発行年	2017-03-21
URL	http://doi.org/10.20832/00000107

『平家物語』と食べること

“*Heike Monogatari* (The Tale of the Heike)” and Eating

柳田 洋一郎

YANAGIDA Yoichiro

はじめに

『平家物語』において食べることは生きることである。清盛は熊野参詣の船に躍り込んだスズキを食べた。栄達の予兆である。鳥羽離宮に幽閉された後白河法皇は静憲に勧められて湯漬けを食べた。復権への転換点であった。俊寛は有王の持参した菓子を食べた。木曾義仲は猫間中納言を迎えて平茸汁を食べた。義経は金仙寺で観音講の饗膳を食べた。常陸房昌命は行家の血でよごれた水飯を食べた。

『平家物語』は後の軍記と同様に日常の食事を語らない。特異な状況での食事を語っている。俊寛は有王にみとられて臨終を迎えることからみると、有王に出会って魚を捨てたことが最期にかかわっている。義仲が出した昼食を猫間中納言は食べなかった。朝廷との対立が深まっていく。以仁王は眠ることも食べることもないまま転戦した。喉の渴きを従者にもらしつつ水無川とよばれる井出の玉川で最期をむかえた。

西郷信綱〔1968〕は源平合戦と並行して起こっていた飢餓に注目した。中国道に進んだ範頼の軍勢が食料不足に悩まされたことは記録によって裏付けられる。けれども物語は義経の活躍と対比して範頼たちは室・高砂で遊女と戯れていたと語る。平家作者は満ち足りていたのでの飢饉の窮状に関心がなかったのだと評した¹。

上洛した義仲の軍勢は周辺諸国の飢饉に悩まされているし、建礼門院は船中の渴きを語っている。物語には、その享受者が背景を参照することで登場人物の困窮を解釈するように仕組まれている。「木曾殿の御料」は略奪者による脅迫の言葉であり、義仲の食事そのものはつつましく貧相なものであった。得長寿院の供養では、導師に選ばれた貧僧が実は薬師如来の化身であったという賤から聖への逆転を語る。寄進された膨大な布施が貧者にふるまわれた。これは奇瑞の物語なのだが、松葉茶で命をつなぐ貧僧のつぶやきに逆転のダイナミズムが隠されている。しかもその転換は、造立者の忠盛が殿上人になるという驚異的な飛躍も重ねられる。「生きるために食べよ。食べるために生きるな」とはソクラテスの教訓だが、『平家物語』は、生きることの困難さを打開する契機を食にみとめている。

テキストとして『延慶本平家物語』を使用した²。得長寿院の供養など他の平家諸本にない記事を含むからである。

1 貧僧の松葉茶

鳥羽上皇は白河に得長寿院を建てた。その造立供養の導師には天下一の貧僧が選ばれ、布施は山のようであった。造営は平忠盛があたった。施工を経営という。工匠たちも勸賞にあずかった。

忠盛は、一身の勸賞には備前国を給はる。其の外、鍛冶、番匠、杣師、惣じて、結縁経営の人夫までも、ほどほどに随て勸賞を蒙る事、真実の御善根と覺たり。(一本 10 枚)

供養に先立って、導師が決まらず、法皇は行徳・慈悲にすぐれた貧僧を選ぶことにした。すると蓑笠を着た僧が現れ、法皇はこの貧僧を導師に定めた。居所をさぐらせると近江坂本の地主権現に向かった。地主権現は現在の^{ひよし}日吉大社である。

御使、みがくれに行く程に、げに地主権現の大床の下に入りぬ。居所の有様、雨皮引き廻して、^{あまかわ}絵像の弥陀三尊かけて、仏の前机に焼香散花の匂い薫じたり。さては何事もなし。但、机の下に、紙にひねりたる物あり、其を取て茶坏にちと入て、^{あか}闕伽桶なる水にすすぎて、服しけり。さて、其の後独言に申しけるは、「とかくして儲けたりし松の葉も、はや乏しく成りぬ。なにをもてか露命をも支ふべき。あはれ、はや御仏事の日になれかし。」(12ウ)

香炉や花瓶を置く机の下から、紙に包んだ松葉をとりだし茶碗にひとつまみ入れて水を注いで飲んだ。乾燥した葉を砕いて保存し、少量ずつ水に溶いたようである。現代の健康茶にも松葉茶があげられる³。アカマツとクロマツがあり、アカマツの方が柔らかいという。摘みたての葉を煮るときは油脂の多い軸を取るが、油脂には薬効がある⁴。乾燥させ焙煎したものもある。

「松の葉」について『延慶本平家物語全注釈』は「山中修行などで五穀を断った行者は、松の葉を服するとされた」として、役行者の例をあげている⁵。

抑役行者と申は、小角仙人の事也。(中略)五色の兔に随て、葛木山の禪頂に上る。藤の衣に身をやつし、松の^{みどり}碧に命をつぎて、孔雀明王の法を修行すること三十余年也。(三末6ウ)

フジヅルの皮の繊維を編んだ衣を着て、松の葉を嚙みながら歩むのが修行者の姿とされた。松葉茶を服したのは典型的な修行者像にそっているということになる。

『十訓抄』第七「思慮を専らにすべき事」に、仙人になろうとした僧の話がある。

河内国、金剛寺とかやいふ山寺に侍りける僧の、「松の葉を食ふ人は、五穀を食はねども苦しみなし。よく食ひおほせつれば、仙人ともなりて、飛びありく」といふ人ありけるを聞きて、松の葉を好み食ふ。⁶

貧僧は「茶坏」を使っていた。薬用の野草茶を「茶」と呼ぶようになったのはチャノキの茶が普及してからのものであり、その普及にしたがって茶杯・茶碗も日常化した。チャノキの栽培や喫茶の普及については栄西の『喫茶養生記』が有名である。それ以前に伝教大師最澄が持ち帰って栽培したという伝承もあり、日吉神社は近江茶の発祥地とされている。徐静波は、最澄が持ち帰り栽培したことは確認できないが、嵯峨天皇(786~842)の漢詩から最澄とともに茶を服したことは事実であるとしている⁷。その後、永忠が茶を持ち帰り、近江^{ほんしやくじ}梵釈寺で嵯峨天皇に献じたことが『日本後記』同仁6年(815)4月条にみえる。

9世紀に留学僧がもたらした茶は一般に普及しなかった。栽培規模が小さく、愛好者は上級の僧侶や貴族に限られたようである。ただし松の葉をすする器を「茶坏」とよぶ程度には喫茶の習慣は知られており、修行僧のように松葉茶を服すことを上級僧の喫茶と対比して貧しさの標示とする価値観も生まれていた。

日吉神社を日本茶の発祥地とする伝承は16世紀の天正年間に成立する『日吉社神道秘密記』に記されており、茶道興隆の時代に最澄に起源を求めたものである。これにもとづいて現代の近江茶の茶舗などが来歴を説明しているのだが、9世紀に伝来しながら栄西の13世紀まで一部の嗜好に留まった理由を詳らかにしているわけではない。

茶と日吉神社の結びつきは、地主権現の本地が薬師如来とされることとも関係する。説法が終わると、貧僧は仏の化身だったことが明らかになる。

御堂の正面より虚空を飛上て、惣門上に暫くをわしましけり。二人の従僧は、日光月光、光りがかがやかし、十二人の下僧は、薬師の十二神将也。御導師は地主権現の本地、叡山中堂の伊王^{ぜんせい}善逝にてぞ坐ける。(15ウ)

伊(医)王善逝とは薬師如来である。貧僧と薬師の組み合わせには、飢饉や役病からの救済を保証す

る意味合いがある。導師に贈られたものは「御布施千石千貫・金千両、其の上に御加布施、御堂の前に山の動き出でたるが如し。」(14ウ)とされ、貧者への施行にあてられた⁸。

地主権現はオオモノヌシとオオヤマクイを祀る。現在の日吉大社では西本宮(大宮)にオオナムチ、東本宮(二宮)にオオヤマクイを祀る。

日吉大社上七社の大床の下は人が立って歩けるほどの高さがあり、そこに本地仏が祀られたという。つまり貧僧が大床の下にいたというのは、貧者が雨露を避けただけではなく、床上の神祇の祭祀空間に対し床下が仏教的祭祀空間となっていた⁹。延慶本では大宮、二宮、十禅師を日吉山王の三聖としてあげ、住吉と八幡若宮を大宮に祀るとする。大宮は三輪明神とされ、神饌の由来を載せている。

始は大津の東浦に現じ御て、其より西の浦に移らせ給て、田仲の常世が船に召て、辛崎の琴の御館、牛丸が許へ入せ給にけり。牛丸、非直人と思て、荒菰を敷て居へ奉て、常世粟の御飯を進せたりければ、常世に託し給けるは、「汝、我氏人と成て、毎年出仕の時、粟の御飯を供御に可備」とぞ宣ける。今の大津の神人は、彼の常世の末葉也。其時の儀式に准へて、卯月の御祭の時、必ず粟の御々供を献るとかや。(89ウ)

大津の東浦、すなわち琵琶湖が瀬田川に注ぐ西岸一帯を粟津という。4月の山王祭では唐崎沖で膳所付近の5つの神社が輪番で粟津御供を供している¹⁰。

2 離宮の湯漬け

治承3年(1179)11月、平清盛が福原から軍勢を率いて上京し、後白河の院政を停止した。「治承三年の政変」とよばれる。後白河法皇は七条殿から鳥羽の北殿に移された。肥前守泰綱が守護した。監視下に置いたということである。

門の内外には武士充満せり。国々より駈集められたる夷なれば、見馴れたる者もなし。つべたましげなる顔けしき、うとましげなる眼やう、怖しともおろかなり。(二本 100ウ)

鳥羽殿は鳥羽作道に西面し、秋の山をはさんで北殿と南殿があった。南側では鴨川が桂川と合流し、そこに渡辺に下る港があった。鳥羽殿には大きな池が作られ、船で宇治や淀、八幡に船で周遊した。水辺の景観が離宮の特色だったが、幽閉生活では庶民の経済生活に隣接することになった。その様子が「賤が下す鵜船の篝火は御目の前を過ぎ、旅客の行通ふ響の音、御耳に答へて眠りを覚し奉る」(105ウ)である。権力があれば饗宴の膳にアユや海産物が盛られたはずだが、今は労働のノイズを聞くだけであった。

法皇にともなったのは「尼せ」とよばれる左衛門佐という老女房だけであった。しばらくして法皇の右腕であった信西の子である静憲法印が来訪した。静憲は俊寛の鹿谷の山荘で法皇と同席し、成親らの悪ふざけを制止していた。この政変では涙ながらに清盛に接見の許可を訴え、鳥羽殿に駈けつくと「栄耀極まって宿運尽きなんとする上、天魔彼の身に入れ代て加様に悪行を企つ」(102ウ)と清盛を非難して法皇を励ましている。

尼せも思入て臥沈たりけるが、法印の参られたりけるを見てをきあがりつつ、「昨日の朝、七条殿にて供御まひりたりし外は、夜部も今朝も、御湯をだにも御覧じ入れず。長き夜すがら御寝もならず。御歎のみ苦しげに渡らせおわしませば、ながらへさせ給わむ事もいかがと覚ゆる心うさよ」とて、さめざめと泣給ければ、「いかに供御はまひらぬにか。此事更に歎と思食べからず。平家世を我ままにして、既に廿余年になりぬ。(中略)天下は君の御代になりかへり、悪徒は水の泡と消失む事只今也」と被申て、供御すすめまひらせける。御湯漬少々しまひりたりければ、尼前も少し力付て、君も聊なぐさむ御心をはしましけり。(二本 101ウ)

後白河は「御湯」も喉を通らない状態だった。紛れ込んだ大膳大夫業忠なりただの息子左兵衛尉に沐浴を望んだ。

大膳大夫業忠が子息、十六歳にて左兵衛尉と申けるが、いかにしてまぎれ参たりけるやらむ、候けるを召て、「今夜、丸は一定覚なり。いかがせむずる。御湯をめさばやと思食は、いかに。叶はじや」と仰有ければ、今朝より肝魂も身に随はず、をむまく（陰魄）計にて有けるに、此仰を承れば、いとど消入様に覚へて、物もおぼえず、悲しかりけれども、狩衣にたまたすき上て、水を汲み入て、こしばがき（小柴垣）をこぼち、大床のつか柱をわりなんどして、とかくして御湯をいだしたりければ、御行水まひりて、泣々御行ひぞ有ける。（二本 100 ㊦）

齊賀万智によれば、平信業の子業忠は永暦元年（1160）の誕生と考えられ、治承3年には20歳だから16歳の息子があったとするのは合わない。業忠本人とみるべきだろうとする¹¹。鳥羽殿にいるのは守護の武士ばかりで、厨に釜があったものの湯を沸かす薪もなかったのである。建物の部材を壊して燃やした。後白河は処刑を予想して身を清めたのである。その後、静憲の励ましで「御湯漬」を服した。

後白河の幽閉は翌年まで続くが、女房やその縁者によって支援を受けている。静憲は信西（藤原通憲¹²）の子で、母は後白河の乳母紀伊局だった。鳥羽殿では兄弟の成範と修範が仕えることになった¹³。「尼ぜ」とともに親王時代から仕えた女房に坊門局がいる。途中から丹後局（高階栄子）も伺候している。

平信業は坊門局の弟だった。後白河のために山科殿を造営し、その功もあって息子の業忠が8歳で長門守に任じられた。信業は六条西洞院に私邸を設けて後白河法皇に提供した。義仲の宿所にあてられ、のちに後白河の御所となった。信業・業忠が近従として昇進したのは平業房やその妻の丹後局の援助がある。業房は平正盛の孫にあたり、治承三年の政変で伊豆に配流された。途中で逃亡し捕えられて処刑されたが、その直後に丹後局は鳥羽殿に入って法皇の寵愛を受けた。丹後局の娘であるきんし観子内親王（宣陽門院）は六条殿を伝領した。業房と栄子のあいだに生まれた教政は、家成の六男実教の猶子となって、母の丹後局が受け継いだ山科殿を継いでいる。

信業は安元2年（1176）に大膳大夫となっている。業忠も文治4年（1188）に大膳大夫となった。大膳大夫は大膳職の長官で、大膳職は宮中の饗宴を担当した。日常の供御を担当するのは大炊寮や内膳司であるが、近習としてこの分野も担ったようである。

治承4年6月、清盛は福原に遷都する。後白河も鳥羽から移された。

一院は、四面ははた板しまはしたる所の、ロ一つ開たるに御坐て、守護の武士きびしくて、たやすく人も不参けり。（二中 97 ㊦）

「牢の御所」と呼ばれた。文覚がひそかに院宣をもらいに来ている。光能卿が仲介した。頼朝が挙兵し、情勢の変化により10月には後白河は幽閉を解かれた。

夢殿と云所にあたらしき御所を立て、日来渡らせ給けるが、三条へ渡せ給べきよし、入道相国申ければ、法皇渡せ給。御輿にてぞ有ける。御共には左京大夫修範候われけり。楼の御所とて、いまいましき名ある御所を出させ給き。世の常の御所へ入せ給ぞ目出たき。（二末 91 ㊦）

福原には清盛が建立した氷室神社がある。『枕草子』にみられる削り氷は、高倉帝や法皇に供されたと思われるが物語には記されない。

水飯は炊いた飯を水で冷ましたり、冷めた飯を湯で温めたりして食べやすくしたものである。飯のぬめりをとって干して携帯食としたものがほしい糰である。行家を捕えた昌命が食事をすすめた場面に登場する。糰は水を加えて柔らかくして食した。

昌命さすがに哀れに覚て、糰をあらわせてすすめければ、水を呑み給わむとて、引きよせられた

りけるに、額のきずより血のさつとこぼれかかりたりければ、被捨にけり。昌命是を取て食て、今夜は江口の長者が許に留りぬ。(六末 46 ㊦)

北条時政に殘党狩りを命じられた甥の時定は、行家を知る僧を捜す。寺僧(三井寺の僧)は取り逃がしたが、山僧(延暦寺の僧)の常陸房が和泉の八木で行家と斬り合い¹⁴、同行した源次宗安が額を石で打って捕えた。宗安は印地らしい。糲を水や湯でもどすには時間がかかるから、水気の多いものを出したのだらう。行家は飲もうとしたが血が落ちたので捨てた。昌命がこれを食べた。素性を尋ねるなかで行家が「さては行家に使はれむと云し者か」と思い出している。昌命は行家の武芸に心酔していたようである。師弟の契りにはならないが血を飲んであやかろうとした。行家は江口から京に向かい、鳥羽街道の赤井河原で斬首された。

その後、意外にも昌命が流罪になった。

「下臈の身にて大將たる者を誅ちつるは、冥加のなき時に、和僧の冥加の為に流遣したつる也」とて勸賞には摂津国土室庄、但馬国に太田庄¹⁵、二か所ををぞ給たりける。(六末 47 ㊦)

意識すると「お前のような下郎が大將を討てたのは、お前に運があったのではなく、大將が神仏の加護を失っていたからだ。そこでお前が神仏の加護を得られるように罪を償わせたのだ」ということになる。義仲は「軍は無勢多勢によらず。大將軍の冥加の有無によるべし」(三末 13 ㊦)というように、冥加は神仏の加護で、武運ともいいかえられる。昌命の流罪には清めの意味があった。

3 木曾の御料

木曾義仲が越後の城長茂を破った横田河原合戦は治承 5 年(1181)夏にはじまる。延慶本の日付は九条兼実の日記『玉葉』で裏付けられる。他の平家諸本や『吾妻鏡』は翌年の寿永元年の秋とする。治承と寿永のあいだに養和という年号がはさまる。治承 5 年 8 月に改元があり、翌年 5 月に再び改元があり寿永となった。

寿永 2 年の春には北国に下向した平氏の追討軍が壊滅し、7 月に平家は都を落ちる。延慶本を除く平家諸本は義仲の怒涛の進撃を演出するために合戦を 1 年ずらしたとみられる。

養和の 10 か月とその前後に全国的な飢饉が起こった。治承 5 年の年頭記事には「吉野国栖も不参、鯨も奏さず」(三本 2 ㊦)とある。国栖奏は贄を献じ歌舞を奏する¹⁶。鯨はマスで大宰府から献上される。翌養和 2 年には「五月廿四日、臨時に廿二社の奉幣使を立らる。飢饉疾疫によってなり。」(三末 8 ㊦)とあり、続いて 27 日の寿永改元が記されている。

諸国の飢饉により兵力を動かすことが困難になったのだが、同時に食糧確保のための動きが活発になった。義仲は北関東の上野国をねらって頼朝と対立し、一条・武田・安田など甲斐源氏は東海と南信濃への進出をねらった。義仲と甲斐源氏の連携を嫌った頼朝は大軍を動かして義仲を威圧し、息子義高を人質に取ることで和平にいたった。

義仲は北に押し出されるかたちで越後に進み、白山勢力の援助を得て上洛の道を開いた。しかし、都も飢饉の影響が大きく、義仲勢の食糧徴発から法皇側との対立が激化した。

寿永 3 年 1 月に頼朝が派遣した義仲追討軍が上洛した。義経の軍勢は宇治川を渡し、法皇の御所であった六条殿を守護した。木曾の滅亡後に立札が立てられた。

いかなる者かしたりけむ、札に書て立たりけり。

宇治川を水付けにしてかきわたる木曾の御れうは九郎判官

田畠のつくりものみなかりくいて木曾の御れうはたへはてにけり

名にたかき木曾の御れうはこぼれにきよしなかなかに犬にくれなむ

木曾が世に有りし時は、「木曾の御れう」と云てしかば、草木も靡きてこそ有しに、いつしか天下の口遊くちずきみに及べり。(五本 36 ㊦)

最初の落首は、義経の快挙を、宇治川の水を水飯にして掻き込む行為にたとえ、九郎に食らうをかけた。義経が判官となるのは 8 月のことであるから、義仲滅亡の直後に詠まれたものではない。次の落首によまれているように「木曾の御料」は義仲の狼藉を象徴する言葉である。新しい権力者の有無をいわさぬ食糧徴発の決まり文句であった。緊急措置を取るしかなかったともいえる。義仲が口にしたのはせいぜい玄米飯か水飯だったという皮肉が含まれる。第三首は飯粒がこぼれることと政権倒壊をかけている。猫間中納言の笑話と関連させると、猫が食べなかったので犬に食わせようということになる。現代と違って、犬には廃棄物が与えられた。

「御料」には皇室財産や貴人の妻などいくつかの意味があるが¹⁷、ここでは貴人の食事のことで、「木曾の御料」と称して食料や薪が徴発されたことをいう。

「木曾都にて悪行振る舞う事付れたり知康を木曾が許へ遣はさるる事」(四 48 ㊦～50 ㊦)には、義仲の軍勢による狼藉糾弾と義仲の弁明・反論が並べられ、院方と義仲が衝突する法住寺合戦につながっていく。入京前後から 11 月の法住寺合戦までを整理しておく。

1. 義仲入京の直前には、すでに京中で略奪が横行していた。頼朝挙兵を聞いて上洛した武士たちが食料を奪った。「畿内より上る所の武士の郎等共、兵糧米の沙汰無く、飢に臨む間、人家に走入て、着物食物奪取ければ、一人としてをだしからず。」(三本 29 ㊦)。
2. 義仲討伐のために派遣された平家の 10 万騎の軍勢も「片道給てければ」(三末 21 ㊦)とされているように、往路の徴発の権限しか与えられなかった。屋島合戦で詞戦いを演じた伊勢三郎義盛は、北国から逃げ帰った越中二郎兵衛盛次を「こう申すは越中国砺並山軍に山へ追い入れられて、からき命生きて、乞食して京に上たりける者な」(六本 24 ㊦)と嘲っている。
3. 都の人々は入京した義仲に迎合した。「家々には武士有る所もなき所も、門々に白旗立ち並べたり。」(48 ㊦)。源氏の白旗を掲げたのである。奈良法師の狂歌がとりあげられている。「法皇を歌によみまひらせてぞわらひける。白さひて赤たなごひに取り替へて頭に巻ける小入道かな」(50 ㊦)とは、法皇が平家の旗印である赤い手拭いはずして白布を裂いてにわかづくりした白い鉢巻をしているという皮肉である。
4. 兵糧について、義仲は「東西の国々塞がりて、京都へ物も上らず、持ち来たる者はなし。」(51 ㊦)と釈明している。ただし不足した物資を強引に調達した。「八幡、賀茂の領を憚らず、青田を刈せて馬に飼い、人の倉を打ち破りて物を取る。」(48 ㊦)「青田」とあるので入京した 7 月ごろのことである。「後には山々寺々へ乱入て、堂塔をこぼち、仏像を破焼きければ」(50 ㊦)とあるように、冬にかけて薪を調達した。
5. 「然るべき大臣公卿の許なむどこそ、はばかりけれ、片辺に付ては武士乱れ入て、少しも穏しき所なく、家々を追捕しければ」(48 ㊦)。「かたほとり」は近郊・周辺をいう。義仲は「片畔に付て少々入取いりどりなむどせむをば、院強ちに咎め給ふべきやうやはある」(51 ㊦)と抗弁する。「追捕」は犯人逮捕にも使うが、ここでは奪取・没収である。義仲は具体的に「入取」と言い替えている。
6. 「在々所々に強盜、竊盜隙無くして、人を殺し火を放つ事、愚ならずと聞ゆ。」(48 ㊦)。ただし「今食はむとて取企てたる物をももの取奪はれ、口を空しけり。」(48 ㊦)といった強引な略奪もあった。また「路を過る者も安事無し。衣装をはぎとりければ、男も女も見苦しき事にてぞ有ける。」(48 ㊦)として「物取ものとり」(59 ㊦)があったこともあげられる。
7. 義仲は下人の監督について弁明している。「下人共多く候へば、左様の事も候覧。又義仲が下人

に事をよせて、落ち残る平家々人もや仕り候覧。又京中の古盗人もや仕候らん。」(49ウ) というもので、確かに平家都落ち後の治安は不安定であった。新たな権力である「義仲」が利用された。「下人」は郎等より下位の従者で、義仲軍の末端で徴発を行った人々である。「義仲の下人」と称して犯罪を働けば斬首して見参に入れると宣言している。

8. 「平家の世には六波羅殿の御一家と有りしと、老いたるも若きも歎きあへる事なのめならず。」(48ウ)。「有りし」の前に脱落がある。前関白基房の「平家の世には、加様に狼藉なる事やは有りしなんど、諸人云い嘆く也。」(48ウ) という発言を参照すると、「六波羅殿の御一家」と言って強引な命令はあったが、これほどまでの乱暴があっただろうかと嘆いたという意味になろう。

「木曾の御料」そのものを見たのは猫間中納言光隆である。

いつしかくぼく大きな合子の、帯引付て渋ぬりなるに、黒々として毛立たる飯を高く大きに盛り上て、御菜三種、平茸の汁一折敷おしきにいすへて、根井以て来て、中納言の前にすえたり。(四 37ウ)

「黒々として」は玄米か粗い精白しかしていない米で、徴発したものとみられる。平茸は周辺で採集したのであろう¹⁸。光隆は義仲に催促されたが食べるふりをしただけだった。

陪膳役の根井から「猫殿の御わけぞ。給われ」と与えられた雑色は「提の下へ投入れたりけるとかや」とする。「提の下」は「縁の下」の誤りと考えられている¹⁹。主人とともに雑色も反発を表したと解されている。覚一本は根井が登場しないので、「わけ」と同じ意味の「猫おろし」で終わっている。猫の食べ残しを食べるという習俗もあった。猫は鼠害を防ぐ家畜として輸入され愛玩用になった。大木卓〔1979〕によると、猫は人の食事と同じものが餌になったから、残りを食べる人もあったとし、猫の残りを食べると喘息になるといった伝承があるという²⁰。根井は猫間殿を猫殿とまちがい、光隆は義仲に小食とからかわれ、雑色は猫の食べ残しをたべることを拒否した。雑色は猫間とは地名であると説明しながら、猫のわけは食べなかったという笑話である。

4 蒸し物と小鳥

西八条の清盛邸の門前に奇妙な作り物が据えられた。

法師の引きこしがらみて、長刀を以て物を切らんとする景気を作ったり。又前に石鍋に毛立ちしたるものを置きたり。道俗男女、門前市をなす。されども心得たる者一人もなし。(一本 59ウ)

石鍋とそれを長刀で切ろうとする法師をかたどっていた。群衆に向かって老僧が「むし物にあふてこしがらむ」であると謎解きをしてみせた。成句としては「糞に懲りて膾を吹く」が知られている²¹。山門僧が後二条関白師通を呪詛した言葉のなかにも「茹物むしものに合てこしがらふで、山王神人宮仕射殺給つる、生々しょうじょうせせ々に口惜し」(一本 80ウ) という用例もある。

注目されるのは「石鍋」である。鈴木康之は、その特異性を指摘している。

古代末期から中世前期にかけての日本列島では、かなりの量の石鍋が使われていた。西暦でいえば、11世紀から14世紀頃にかけての限られた時期に集中して利用されており、それ以前もそれ以後も、日本列島の食文化においてはほとんど利用されていない、それが石鍋である。²²

石鍋は滑石製²³で、長崎県西彼杵半島で生産されたものが全国に運ばれたとみられる。南西諸島でも発掘されている。教盛が「肥前国加世庄」の領地から硫黄島に流された娘婿の成経に衣食を送ったこと(一末 76ウ)、俊寛が硫黄を掘って「九国地へ通う商人の船」と取引したこと(二本 63ウ)とも関係している。

発掘されている石鍋は、口径 20 センチほどで、現代のピピンパの石鍋と変わらない。延慶本の記事によって、これで「むし物」を調理したことが分かる。蒸し器としては二段式の甑(こしき)があった

が、土器のため壊れやすかった。石鍋は使いやすく熱効率がよかった。石鍋の衰退は、河内鍋に代表される鉄鍋や高温で焼き上げた土鍋の普及による。

作り物は、前夜に実行された摂政の行列襲撃を風刺したものであった。石鍋の蒸し物は熱いから、それに怯えて腰を引きながら長刀を振るう法師を配したものである。事件の発端は、摂政基房の行列に出会った資盛たちが下馬の礼をとらず、摂政の随身に制裁を受けたことによる。後日、参内する摂政を待ち受けて随身の髻を切るなどした。『平家物語』は「平家の悪行の始」とするが、臆病者の強がりという評価もあったわけである。

資盛は摂政の行列に無礼を働いた。父の重盛は無礼を戒めてもらったのだからありがたいことだと息子を謹慎させた。祖父の清盛は平家に対する侮辱ととらえて報復行動に出た。日記などからは重盛が報復したようである。

資盛が無礼を働いた背景に鷹狩がある。

去嘉応二年十月十六日に、小松内大臣重盛公三男、新三位中将資盛、越前守たりし時、蓮台野に出て小鷹狩をせられけるに、小侍二三十騎ばかり打むれて、はいたか（空白）あまたすへさせて、鶉、雲雀追い立て、終日かり暮されけり。折節雪ははだれに降たり。枯野の景気面白かりければ、夕日、山の端に傾きて、京極を下りに被帰けり。其時は松殿基房摂祿にて御座けるが、院御所、法住寺殿より、中御門東洞院の御所へ還御成けるに、六角京極にて殿下の御出に、資盛鼻づきに参り会たり。越前守、誇り勇て代を世ともせざりける上、召し具したる侍共、皆十六七の若者にて、礼儀骨法を弁たる者の一人も無かりければ、殿下の御出とも云はず、一切下馬の礼儀も無りければ、前駟、御隨身、頻りに是をいらつ。（一本 55 オ〜り）

鷹狩は権威の象徴で、平安時代には主鷹司と蔵人所の鷹飼が置かれた。蔵人所の鷹飼は饗宴用の材料確保が主務であった。武士の狩猟では弓の技を競った。「翔鳥」は飛ぶ鳥を射る。屋島で平家の女房が扇的的を掲げた場面では、後藤兵衛実基が、「それこそ係取を三度に二射て取者にて候へ」と那須余一資高を推挙している。

小鷹狩りは秋の狩りである。ハイタカ・ハヤブサなど小型の猛禽を使って、ウズラ・ヒバリ・ツグミなどを獲る。小鳥は焼くか生食である²⁴。

鳥獣肉食の対極に仏教の肉食禁止がある。殺生戒にもとづき、戒を犯せば現法を受けるとされた。天皇は功德を積むために殺生禁断令を出した²⁵。食肉禁止は、興奮の抑制や精神の浄化という効果があるという。逆にいうと肉食は欲望を増し闘争心を鼓舞することになる。

延慶本には平家繁昌の奇瑞として、清盛が鳥の卵を呑んだとされている。

また年三十七のとき、二月十三日の夜半ばかりに「口あけ口あけ」と、天にものいふよし夢にみて、おどろきて、現におそろしながら口をあけば、「これこそ武士の精といふものよ。武士の大將をするものは、天より精をさづくる」とて、鳥の子のやうなるもののきはめてつめたきを、三つ喉へいとみて、こころも武く奢りはじめけり。（一本 24 ㍊）

天から授かったものなので正体は分からない。鳥の子はヒナともとれるが、冷たく複数のものが喉にとおるのだからこの場合は卵である。「武士の精」が卵のかたちをとって身体に取り込まれる。「武きこころ奢ること」は『平家物語』の冒頭では否定的評価を与えられているが、武芸を誇る者、軍事的覇者に共通する特質としている。

資盛の性格を「誇り勇て代を世ともせざりける」として、そのため貴人に無礼を働いたとみるのが一般の解釈だが、鷹狩の獲物に起因するとも考えられる。

5 熊野の精進

清盛は伊勢路から熊野参詣をした。阿野津から新宮に向かうとき、スズキが船中に踊り込んだ。

相国のかく繁昌すること、偏に熊野権現のご利生なり。その故は、清盛そのかみ鞆負の佐たりしとき、伊勢路より、熊野へまゐりけるに、乗りたる船のなかへ目おどろかすほどのおほきなる鱸すずきとびいつたりけるを、先達これをみておどろきあやしみて、すなはち巫かむなぎふみ文をしてみるに、「これはためしなきほどのおん悦びなり。これは権現のご利生なり。いそぎ養ひたまふべし」と勘へまうしければ、清盛のたまひけるは、「もろこしの周の西伯留〈昌〉といひける人の船にこそ、白魚をどりいつたりけるとは伝へきけ。このこといかがあるべかるらむ。さりながら先達はからひまうさるるうへは、なかば権現の示したまふなり。もつとも吉事にてぞあるらむ」とのたまひて、さばかり十戒をたもち、六情根を懺悔し、精進潔斎したる道にて、かの魚を調美して、家の子郎等、手振、強力に至るまで、一人ももらさず養ひけり。(一本 23 ㊦)

「白魚入船」は『史記』の周武王の故事で、紂王の軍を破る予兆だった。跳び込んだ魚を調理・賞味したとは書かれていない²⁶。清盛は食べるべきか否か躊躇したが先達の占いに従った。権現からの賜物として同行した人すべてに食べさせた。船に躍り込んだ魚は、神から授かったものだから精進に反しないものとされた。その後、清盛は栄達を果たしたので、この判断は誤っていなかった。

反対に、熱心に祈願したにもかかわらず逆境に陥ったのが平康頼である。後白河法皇の近習で、平家討伐の謀議に加わったという罪状で硫黄島に流された。康頼は3度にわたり信仰について反省している。

1. 判官入道は、そのかみ熊野権現を信じ奉り、三十三参詣の志ありけるが、今十五度を果たさずして此の島へ流されたり。(一末 76 ㊦)
2. 康頼入道申しけるは、「しかも三十三度の宿願は後生菩提とは存ぜず候。只併しながら今生の栄花、息災延命と存じ候き。」(78 ㊦)
3. さてもさても聖照熊野参詣、宿願安心こそ不浄に候しかども、十八度は参て侍りき。残る十五度を、後生善所の為に、岩殿にてはたし候ばやと存じ候。大神も小神も屈くつしょう請ようごうの砌に影向し給ふ事に候へば、権現定めて御納受候べし。(80 ㊦)

康頼は重盛から許しを得て、撰津国狗林(駒の林)で出家し聖照を称した。

熊野詣では観音信仰の影響から三十三度の参詣という目標設定が行われた。しかし、京を起点として1か月以上かかる参詣を、生涯に33度行うことはかなり難しく、裏を返せば、健康で経済力があり、しかも長寿でなければ達成できない目標であった。院政期の上皇・法皇のうち後白河だけが34回を達成している。白河は9回、鳥羽は21回、後鳥羽は28回であった²⁷。

康頼は熊野に18回参詣したが権現の加護が得られなかった。ゆえに祈願が間違っていたと考えた。現世利益だけを望んで、来世を祈らなかったからだと反省する。極楽往生こそ本旨である。さらに進んで過去の宿願は誤りであり「不浄」だったと断じた。ただし権現はどこにでも現れるから、硫黄島の岩殿を権現にみたくて修業を行えば願いが叶うだろうと考えた。康頼は残り15回の巡礼を流刑地で行動とした。

硫黄島に巡礼道を作って参ろうという康頼に成経は賛同するが、俊寛は念仏を批判し、法勝寺にいた卿律師ほんぐう本空こそ理想だと語る。本空は真言天台の学匠だったが、入唐ののち禅門に移った。

禅の法門に移うつり候ひて、無行第一の僧になりて候也。神をも敬はず、仏をも敬はず、乞者非人なればとて賤しむ事なし。(中略)すずけさ(数珠・袈裟)もかけず。仏に花香をも供せず。念仏も申さず。経をもよまず。(81 ㊦)

坐禅は初心者の修行であって、達磨は座禅をしなかったと放言する。栄西・道元の鎌倉時代の禅宗が

登場する直前の考え方である。

五辛酒肉ほしいまま 檀ぶく に服し、懈怠無慚けたいわざんの高枕打ちして、臥しぬをきぬし侍る也。(82ウ)

ここではじめて食の問題が現れる。俗界とのあいだに境界をもうけ、俗界にはない修行を行い食の禁忌をもうける。だが悟りに至れば境界は無意味である。だから本空は「五辛酒肉」も食したし、修行もしなかったという。

「五辛酒肉」を「葷酒くんしゆ」ともいう。禅宗では門前に「不許葷酒入山門」の語句を掲げ、悟りを妨げる飲食物を禁じた。五辛は『梵網菩薩戒經』の「大蒜・革葱・慈葱・蘭葱・興渠」があげられる。生育地も時代も異なるので比定は難しいが、一般に「ねぎ・らっきょう・にら・にんにく・はじかみ」があてられている²⁸。

本空を手本にした俊寛だが、硫黄島の衣食は成経の舅である教盛が「肥前国加瀬庄」から送られたものに頼っていた。成経康頼が帰洛を果たすと俊寛は自給を強いられた。俊寛の童である有王が島を訪れると異様な人物に遭遇する。

衣装は、絹布とも見へ別ぬを腰のまはりに結び集めて、あらめと云ふ物をはさみ、左右の手にはなましき魚の少を二つ三つにぎって、はげうであゆむ様にはしけれども、余に力らなげにて、よろよとして、砂に只一所にゆるぎ立たる者一人あり。(二本 55 ㉮)

有王の「非人乞凶の中にも未かかるさましたる者こそみざりつれ」という感想を漏らす。他方、俊寛は来訪者が有王であることを認め、生魚や海藻を持つことを「あまりにはづかしく悲て」(55ウ)、やりすごそうと思うが、懐かしさを抑えきれず「手ににぎりたる魚をいそぎ投すてて」、有王にむかって名のりをあげた。

有王と俊寛のそれぞれの視点から情況が語られている。有王は主人とは気づかないが、俊寛は恥ずかしさを覚える。つまり都の視線からは辺境の貧者としか見えないけれども、都の視線に見られていると認識した俊寛は、魚と海藻を捨てる。この瞬間に師弟は再会を果たすわけだが、食の観点からみれば俊寛は自給による生存という生き方を放棄することになる。

俊寛はひとり残されてからの島の生活を語る。

身に力のありし程は、此の山の峯に上りて硫黄と云う物を取りて、九国地へ通ふ商人の船の着きたるに取らせて、日を送りき。身の力よほりをとろへて後は、山へ上るべくもなければ、野沢に出て根芹をつみ、ものう 瀬もき蕨ををりて、さびしさをなぐさむ。浜に出でては波に打よせられたる荒和布あらめをひろひ、つりするあまに膝をかがめ、手を合わせて魚を乞ひて食事にして、今日までは命をつぎつるなり。(62㉮)

薩摩半島沖にある硫黄島は火山島で、山頂付近で硫黄が採取される。九州に運ばれ博多から宋に輸出された。火薬の材料と考えられる²⁹。硫黄と食料を交換していたが、体力がなくなると、野草や海藻を採り、漁師から雑魚をもらった。根芹や蕨をあげるのは聖・山伏の食料になったもの³⁰ともみられるが、セリ・ハナワラビは南西諸島でも自生している。

有王は俊寛の最期をみとる役割を担う。俊寛の自給体験は有王が主人を養う知識となった。衰弱した主人にかわって有王が食事の世話をしたが、この島で入手できる食料は限られていた。魚や海藻も食べなければならなかったはずである。それよりも俊寛にとって決定的になったのは、有王が持参した菓子であった。

かかる思ひの中なれども、僧都の料にとて、菓子体の物、塵ばかりづつ持ちたりけるを取出てすすめければ、今日くひて明日くうべきものにてもなし、明日くひて又次日くうべきにてもなければ、急ぎてくわざりけり。童が持ちて渡る志の切なればとて、くひけれども、食わすれて久しくな

れば、気味の程も覚へざりけり。(61ウ)

数カ月の旅を経ているので乾した木菓子であろう。クリ、クルミ、ウメ、カキ、ナツメなどがある。菓子は食事の最後や客人の接待に使われた³¹。都にいたときの俊寛の日常では、侍童である有王が供したものである。

俊寛は硫黄を掘り、漁師に手を合わせてでも食料を手に入れようとした。本空の境地に達していたのかもしれない。けれども物語は帰洛の期待があったと語る。自身はすでに菓子の味さえ忘れていた。都の食べ物、俊寛の執着を期待につなぐものにはならず、むしろ生きることを断念させた。俊寛にとって、魚や海藻は生きるためのものだったが、都の菓子は執着を断ち切るものであった。

(2016.11.26)

1 西郷信綱「飢えたる戦士」『火山列島の思想』筑摩書房 1968年。

2 北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語』本文編上下、勉誠社 1990年。本文はカタカナ表記だが読みやすさを考慮してひらかなに直しルビを振った。引用箇所については他の刊本での参照の便宜を考慮し巻と丁数で表示した。

3 「仙人が食べていた不老長寿の薬という逸話がある。」とされている。

健康茶情報 <http://homepage3.nifty.com/kenkoucha/akamatsu-kenkoucha.html>

4 効果・効能として「血液浄化、胃潰瘍、歯槽膿漏、血管壁強化、滋養強壮、食欲不振、低血圧症、冷え性」があげられている。

5 延慶本注釈の会編『延慶本平家物語全注釈』第1本(巻1)、汲古書院 2005年。

6 やたがらすナビ http://yatanavi.org/text/jikkinsho/s_jikkinsho07-01。

7 徐静波「中国におけるお茶文化の展開とその日本への初期伝来」『京大大学生涯教育学・図書館情報学研究』10、2011年。京都大学学術情報リポジトリ紅、<http://hdl.handle.net/2433/139407>。

漢詩は『文華秀麗集』中所収の「澄公が「奉獻詩」に答ふ」で、そのうち「羽客講席に親しび、山精茶杯を供ふ。深房春暖かならねど、花雨自然に来る」が引かれている。

8 『長門本平家物語』はより詳しい。

9 難波能面クラブ；戸原吉昭 <http://www.y-tohara.com/hiyoshi.html>。

日吉造 <http://www.genbu.net/tisiki/hiyosi.htm>。

小田雄三「後戸考(上)―中世寺院における空間と人間」『名古屋大学教養部紀要』29、1985年。小田は蓮華王院本堂の改築の例があげて建築史から床下祭祀の発生を説明している。「創建(平安末期)時には廂の間が土間であった。(中略)床張になることで、仏堂はもう一つの(来迎壁の成立による内部空間の分裂をいま一つの分裂とすれば)内部空間の分裂を生ずるのである。ここには後戸、すなわち仏の背後に成立した空間と同様に、仏の足下に成立した庇護された空間が成立するのである」(p.44)。

10 日吉大社公式ブログ <http://ameblo.jp/hiyoshitaisha/>。

11 齊賀万智「後白河院説話の周辺に関する一考察―六条西洞院とその周辺の人々の関係性から」『国文学研究ノート』53、神戸大学 2014年。

神戸大学学術成果リポジトリ Kernel、[URL:http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81008687](http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81008687)。

12 高階経敏の養子として高階姓をなつた時期がある。高階栄子との関連を示唆する。

13 「藤中納言成範、左京大夫修範、兄弟二人ぞ被免、参ぜらる」(二中2ウ)。

14 踏み込んだ時、出迎えの宴が用意されていた。「昌命やがて押寄せて打入りて見れば、四十計なる俗の、褐衣の直垂小袴きて、紅梅の檀紙にて口裏たる唐瓶子取りまかなひ、銚子提取りをきて、肴菓なむど取ちらして、既に行わむとする所に」(六末44ウ)。

15 高槻市土室、豊岡市但東町太田にあたる。

16 浄見原神社で1月14日に行われる国栖奏では、山菓(栗)、醴酒(一夜酒)、腹赤の魚(ウグイ)、土毛(根芹)、毛瀾(ヤマアカガエル)が供される(wikipedia)。腹赤奏とともに、腹の赤い魚やカエルが使われている。

17 根井が「御料にしからせ給」(四36ウ)と発言している。この「御料」は貴人・主人をさす。

- 18 飢饉のときキノコに助けられたという伝承がある。滋賀県栗東市の「菌（くさびら）神社」には、舒明天皇の時、飢饉があり周辺一帯にキノコが大発生して住民を救ったという伝承がある。
- 19 縁の下に投げ入れたとすると、雑色は庭にいたことになり、義仲の精進合子も放棄したことになる。従者が控える部屋に三階棚などの提を置く台があり、その下に投げ入れたとも考えられる。
- 20 大木卓『猫の民俗増補』田畑書店 1979 年。
- 21 屈原『楚辞』九章の詩句「懲於羹而吹壺兮、何不變此志也」にもとづく。
- 22 鈴木康之、草戸千軒を考える；石鍋の謎
[http://blog.goo.ne.jp/kusado/e/6efb582ba47ea7aa528ccd9d155f0f7b。](http://blog.goo.ne.jp/kusado/e/6efb582ba47ea7aa528ccd9d155f0f7b)
- 23 滑石は水酸化マグネシウムとケイ酸塩からなる。用途は、食品添加物、チョーク、ベビーパウダー、利尿剤など。ヨーロッパではパンや菓子の増量にも使われた。
- 24 フランス料理のジビエは狩猟鳥獣の料理である。狩猟と料理がつながっている。ブリア＝サヴァランが『美味礼讃』（岩波文庫 1967 年）で「いちじくくい（ベクフィエグ）」の生食を紹介している。
- 25 建春門院崩御の後、禁断令が発せられた（一本 92 ㊦）。
- 26 紂王については残虐なエピソードがあり、重臣の謀叛を疑い、九侯を醢（しおから）に、鄂侯を脯（ほしにく）にした。のちの武王である西伯昌に対しては人質の長男伯邑考を煮殺し羹（あつもの）を昌に飲ませた。
- 27 白河上皇の熊野御幸 <http://www.mikumano.net/setsuwa/sirakawa.html>。
- 28 『仏教辞典』岩波書店 2002 年。
[http://blog.goo.ne.jp/tenjin95/e/f19ba54ee8b1683f864676fe4ab0bd5c。](http://blog.goo.ne.jp/tenjin95/e/f19ba54ee8b1683f864676fe4ab0bd5c)
- 29 山内普次『日宋貿易と「硫黄の道」』日本史リブレット、山川出版社 2009 年、
薩摩硫黄島の紹介 https://gbank.gsi.jp/volcano/Act_Vol/satsumaoujima/vr/doc/056.html。
- 30 『梁塵秘抄』に修行者の食物を列挙した歌謡がある。425「聖の好むもの 比良の山をこそ尋ぬなれ 弟子やりて 松茸、平茸、滑薄 さては池に宿る蓮のはい 根芹（ねぜり）、根ぬ菜（ねぬなは）、牛蒡（ごんぼう） 河骨（かわほね）、独活（うど）、蕨、土筆（つくづくし）」。427「凄き山伏の好むものは 味気な凍てたる山の芋 山葵、かし米、水雫 [みずな?] 沢には根芹とか」。
- 31 伊豆の頼朝が文覚を迎えたときに「酒、菓子体の物取出して被勸」（二末 38 ㊦）とある。